
悪霊なんかじゃない

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪霊なんかじゃない

【Nコード】

N5432V

【作者名】

三嶋文絵

【あらすじ】

梓は別に悪霊ではない。犠牲者を求めているわけではない。誰も何もしなければ、何かを返すこともない。だから被害にあったとすれば、それはそれだけのことをしたからだ。旅立てずにいるだけ、忘れられずにいるだけの、梓はただの死者に――すぎない。

（前書き）

書いてみたらホラーというより、単なる悲劇になってしまった気もします……。でも少なくとも最後の最後はホラーのつもり。どうか寛大なお心で、不慣れなんだなと思ってご覧くださいませ。

語れるとすればわたしぐらいなので語らせてもらおう。長く無人だった家を安く手に入れて、三人家族があるとき引っ越してきた。夫婦は再婚したて、否、近々再婚予定で、娘の梓は妻の連れ子だった。つまり、梓の母親は梓の父親と離婚したばかりで、離婚の原因となった不倫相手と一緒にいるところだった。離婚後半年は女性は無縁で再婚できない。

継父予定は梓を邪見にせず、寧ろ機嫌を取るような言動を見せたが、梓は母親たちを冷ややかに見ていた。離婚も再婚も転居も転校も好きにすればいいし、付き合うしかないことは付き合うが、そうでないことでは放っておいてくれという態度だった。勿論親たちは好きにして、半年後には予定通り結婚した。

母親が継父に首ったけなのは今に始まったことではないらしく、娘は別に落胆してもいなかった。親というものは衣食住さえ保証すればよいと、本気で考えている節があり、そういう点では母親夫婦は合格だった。仲のよい幸福な家庭というわけではなかったにしても、平穏で安定した日々を三人は送っていた。

狂ったのは梓が高校に入った年のことだ。母親の留守を見済まして、継父が梓を手込めにしたのである。ここまで何かに必死になれる人間だったかと目を瞠るほどの抵抗をしていたけれども、腕力に屈して結局は意のままにされた。

泣き寝入りするような性格ではないように思っていたが、事実上泣き寝入りだった。尤も文字通り枕を涙で濡らすようなことはなく、内心ではいつか復讐してやると誓っていた様子ではある。とはいえ誰かに打ち明けることもできなかったし、裏で復讐計画を進められたわけでもなかった。

継父はいい気になって、その後も何度となく継娘を犯した。初めは一々抵抗していたのが、段々無駄なこととはしないようになり、そ

の都度怒りを掻き立てることもなくなって無感動になっていき、やがてはおい、と呼ばれるだけで理解してついていくようになるまでを、わたしは具に観察した。

そして——終わりの日が来る。夫と娘の関係に、梓の母親が気がついたのだ。激昂した女は家中にガソリンを撒き散らして火を点けた。

梓の立場になってみれば、母親はあまりに遅すぎた。その上まさか恋敵として罵られるとは想像だにしていなかっただろう。誰が誘惑などするものか。

「地獄に落ちろおまえら！」

梓は母親につかみかかった。逃げようとする継父に追い縋り、火のついた腕でしがみついた。断末魔を灼熱が呑み込み、家は中身ごと焼け落ちた。周囲に飛び火しなかったことが不思議なほどの業火が、一軒分の土地を更地に戻して一つの幕が下りた。

一切が灰となってしまった後で、何があったかを外から知るのとは不可能であつたろう。遺体さえほとんど、梓に至っては全く、残らなかったほどだ。放火だろうと推測できるぐらいか。

さぞ買手手がつかなくなるだろうと思えば、極端なまでに安くなったためか、事件の跡地はその割には早いうちに売れた。余程神経が図太いのか、あるいは事情を知らなかったか、それとも事情を知らない誰かに転売する気ででもいたか。隣り近所に奇異の目を向けられながら、新たな持ち主は新たな家の建設を早速始めた。

が——その建設現場で、不審火が起こった。否、続いた。

火の気のないところから、ついさっきまで何事もなかったところから、炎が立つのを幾人もが見た。頻繁でこそなかったが忘れそうな頃には起こって、忘れさせようとしなかった。特に理由もないのに気分が悪くなったり、何気なく触れた物が異様に熱かったり、記憶にない火傷が体にみつかったりということもあったらしい。

現場の人間に少しずつ、現場に行くことを嫌がる者が出始めた。

悪戯や偶然と片づけられなくなった者が増えてきた。壁ができて家らしくなってきた頃から、工事自体も滞りがちになった。

そうと知って怒った施主は現場を訪れた。三人もが灰になった土地を、火事の記憶も新しいうちに買ったような人間である。幽霊話など勿論本気にしていなかった。下らない噂や臆病な妄想で工事が遅れていることに酷く立腹していた。

「何をしてるんだ。どこから入った」

家の中を覗いて少女を目にし、いきなり叱りつけたのもそのためだろう。ここにいていい人間ではないことだけしか、即座には理解しなかったのだ。パジャマ姿であることぐらい、普通は一目でわかりそうなものだが。注意力があれば、裸足であることも。

が、そんなところには目もくれずにずかずかと近づき、つまみ出そうと腕をつかみかけ——自分の指が少女の腕を突き抜けたことで、流石に気がついた。初めて施主は少女を注視した。

遠目には無表情に、梓は相手をみつめていた。目の奥がぎらぎらとしていることが、面と向かえばけれどもわかる。男は一步後ずさった。幽霊を信じていないから恐れていなかったのもあって、実在するとなれば話は違ったのだろう。

もう一步下がって、そこで躓く。男の目を睨んだまま体は微動だにせず、首だけを動かして梓はそれを追った。男は尻餅をついたまま、後ろ向きに這うようにして、視界から外れようと横へ動いた。梓は首をひねって、否、飽くまで顔は体と同じ正面に向けたまま、足の裏も床につけたままで、体をくるりと回転させて追いかけた。

自分以外には少女の姿が見えていないことも、この頃には悟っただろう。尤もこの場所に普段から出入りしている者たちは、何か恐ろしいものがそこにいることを施主の様子から察した。ほら、言っただけでしょう、というようなことを口にしながら慌てて手を貸す。ほうほうの体で立ち上がった男は梓から目を離せずにいた。

梓の髪がぷすぷすと音を立て始めた。

男は耐えきれなくなったように身を翻し、家から飛び出し、庭か

ら飛び出して——自転車に、衝突した。

幸運に感謝するべきだ。ぶつかって転倒したその鼻先を、自動車を通りすぎていったのだから。折よく自転車が通らなければ、自動車の前に躍り出ていたところだった。

打ち身と擦り傷程度で済んだのだろうと思うが、その後ふつりと工事はやんだ。施主の身に振りかかった災難だけでなく、あの施主が建設をやめたこと、あの土地を手放したらいいことがまた噂を呼んだ。それほどの変化をもたらすような何に遭ったのだろうと。

梓としては『出た』つもりも脅したつもりもなかっただろう。ただあの火事のことを思い出していただけだ。男がいれば継父を、女がいれば母親を、思い浮かべずにはいられなかっただけだ。特にあの施主はあのと時の継父を彷彿とさせたのだろう。母親に事が知れたのは、仕事か何かであんな風に苛立っていた継父が、妻の帰宅時間に注意を払わなかったことが原因だった。

ともあれ、建設途中の家にはそれきり誰も現れなくなった。火事のすぐ後に訪れてもよかっただろう静寂の日々がようやく来た。心乱されることがなくなり、梓は平穏を得た。

正確に言えば、現れなくなったのは堂々と出入りする者であって、こそこそと忍び込んできた者は少しばかりいた。噂は結局噂なのだ。又聞きが重なるにつれて真剣みは薄れていくし、万人の耳に入るわけでもない。

例えば、住所不定と思しき老人が泊まっていたことがあった。

否、恐らく実際の年齢は、老人とはまだ呼ばない程度であつたろうと思う。未完成といっても壁があり屋根があり、階段を上って二階へ行くこともできたから、ねぐらとしてはなかなか上等だったのではなからうか。ただ、夢見でも悪かったのか、夜が明けるとそそくさといなくなってしまったが。

高校生が肝試しに来たこともある。付き合わされたく友人の背中に張りついている者もいれば、その友人とは正反対にわくわく

した様子で辺りを見回している者もいた。期待していたような現象は何も起こらなかっただろうが、天気予報とかけ離れた熱帯夜に困惑している様子は見受けられた。二回は来なかった。

何もないれば梓は静かにしていた。犠牲者を求めて留まっているわけではないのだ。そうであればこの家の建設がここまで進むこともなかったろう。大体周りも気が利かない。ここが一家の火葬場となり墓場となったことを知っているなら、誰かしらがその霊を慰め、癒す試みをしてやってもよさそうなものを。

誰も何もしなければ、何かを返すこともない。安眠を妨げる不届き者も、追い払われる程度で済んでいる。刺激されればされた分だけ、反射的に返すぐらいが何だろう。旅立てずにいるだけ、忘れられずにいるだけの、梓はただの死者にすぎないのだ。悪霊でも何でもなく。

悲惨なことが起こるのは、他の誰かが持ち込んだときと決まっていた。

その男が入ってきたときは、不動産屋の社員かと思った。曰くつき物件の担当を押しつけられて、知らずにか本気にせずにか見回りに来たのかと。というのは恐れる風も遠慮する風もなく、未完成の家に入ってきてあちこち調べていたからだ。

尤も入り込むだけなら鍵は必要ない。この土地がもう一度売れたところで、その買い主がこの家を完成させようとすることもあるまいから、現状を仔細に知っても意味はないはずである。どこをどう気に入ったというのか、男はほくそ笑みながら帰っていった。確なことにはなりそうにないという、楽しくもない予感がした。

それから間もない、雨音の響く夕方のことだ。視界の悪い中を自動車が一台、自然な様子で庭に入ってきて、造りかけのガレージに停まった。降りてきたのは勿論あの男で、あのときの梓と同じ年頃の、後ろ手に縛って口を塞いだ少女を連れていた。制服姿ということは、学校帰りを狙ってさらったのだろうか。

二人が入ってくると、梓はゆらりと頭をもたげた。これまでの侵入者とはわけが違う。それはこと梓にとって、注視せずにはいられない光景だった。

少女はナイフを当てられながら、思いの外しつかりとした足取りで歩いた。どこか梓と似通うところがあった。怯えて震えるようなことはなく、嫌悪と侮蔑の表情も露に、虚勢かもしれないが毅然とした態度を維持している。といってそれが望ましい方へ結実するわけではない。取り乱す姿を曝さずに済んでいるとしても、それは単にプライドの最後の砦にすぎないのであって——例えばそれで男が興醒めして解放する気になるようなことはないのだ。

男が少女を座らせる。少女は一瞬、賭けるようなまなざしを見せた。このときまではほんの僅かであっても、目的が純粹に身代金のみである可能性が残っていたのだ。

次の瞬間それを打ち砕いて、男は少女を押し倒した。

が、途端に少女は猛烈な勢いで暴れ始めた。ここまで来れば不要とばかり、ナイフを手放してその辺りに置いたのを見て取ったのである。少し慌てた男が拾うよりも早く、少女の靴はそれを蹴り飛ばした。凶器は壁にぶつかって大きく跳ね返った。

そして、けれども、そこまでだった。男はこつを知っているように、少女を床に押さえつけた。死に物狂いの抵抗を少女は続けたが、大の男が本気を出せば、梃子搦らせることはできても敵いはしない。身動きが取れないことはなくてもはねのけられることもない。少女の気持ちちが挫けるまで、男はしばらく待てばよかった。

この先の展開が見えるようだ。力尽きたとき、心も折れる。無駄なのだと体が覚える。必死になっても何にもならなかったではないか。その後はされるがままだ。また同じことが起こる。同じ目に遭う。梓もそうだったように。

——そう思ったが、そうはならなかった。その梓が不意に少女の縄を、手首から腕まで一気に解いたのだ。

突然自由になったことに驚く暇もあらばこそ、少女はその手を伸

ばして触れた物をひつつかみ、振るった。流石に男が身を引いて、勢いに任せて少女は半ば身を起こすことに成功し、逆手に握っていたそれを盲滅法に叩き込んだ。

悲鳴も上がらなかった。ただ奇妙な呻り声を発して、真後ろに倒れて男は頭を打った。否、落ちていく頭に手を添えて、力一杯梓が床に打ちつけた。

心成しか雨脚が強くなったような気がした。動かなくなった男をみつめて、肩で息をしながら少女は座り込んでいた。男の胸の真ん中に、あのナイフが柄のところまで埋まっていた。

少女の目に映らないところで、梓が憑き物の落ちたような顔をしていた。

縄を解き、頭を割っただけではない。ナイフが上手く少女の足にぶつかったのも、跳ね返ってその手許にまで転がってきたのも、あやまたず心臓を貫いたのも、梓が誘導したためだ。そのときは無意識だったかもしれないが、今は自覚しているようだった。

少女を救うことは梓にとって、継父に初めて襲われたときの自分を救うに等しかった。過去へ戻って自分自身を守ったと同じことだった。そのときから始まった屈辱の日々も、その末に待っていた灼熱の最期も、これで訪れることはない。

継父が燃えても母親が焼けても晴らされなかった恨みが、砂のようにならざらと崩れ去っていく。母親たちと共に引越してきて以来、一度も見せたことのなかった爽やかな表情をして、梓は少女に目を向けた。

少女の呼吸はゆっくりと落ち着いていった。かなり時間が経ってから、手を上げて猿轡を外した。気を鎮めるのにどれほど時間をかけようと、男が目を覚まして再び少女を襲う気遣いはない。

——大丈夫。もう大丈夫。もうこいつには、何もできやしない。見えない微笑みには当然応えず、少女はふらりと立ち上がり、男の顔が見えるところへ行った。頭を中心にじわじわと広がる血溜ま

りには、ここで初めて気がついただろう。しばらく凝視していた。やがて静かに向きを変え、解けて落ちていた縄を拾う。梓は怪訝な顔になった。半ば放心している様子で少女は歩き始めた。虚ろな目で天井を眺め、力が抜けたようにだらりと垂れた手で縄を引きずりながら。

そのまま一階を一回りしてから少女が階段に足をかけたのと、悟った梓の顔つきが変わったのとはほぼ同時だった。

少女は首を吊ろうとしていたのだ。

さらわれたのであり、犯されかけたのである。無我夢中で抵抗しただけの、その結果である。単純に殺人とくくるのは酷だろう。法的にも、あるいは裁判所の習慣としても、そういった事情は考慮されるはずだ。殺人犯として扱われることを憂えたのでは、けれどもなかった。誰がどのように慰めようと、男の心臓に凶器を刺したのは他ならぬ少女の手なのであって——そのことに、少女は耐えられなかったのだ。

縄をかける場所を探してよろろと階段を上がるのを、信じられないというまなざしで梓は追った。その形相は段々と、死に際のそれに変わっていった。

助けてやったのに。

守ってやったのに。

——救ってやったのに！

少女はぼんやりと顔を上げた。ほんの四段先に迫った階段の天辺に、怒りに頬を燃え立たせた梓が姿を現したのだ。けれども少女はしばしの間、不思議そうな顔もせずには佇んでいた。

次第にその目に光が戻ってきた。苦痛の色がそこに混ざった。驚愕も。

「……う……」

食い縛った歯の間から呻きが漏れた。空いた方の手を腹に当てる。「何……」

口許だけで、梓は笑った。目は爛々と光っていた。パジャマの裾

や袖口にちろちろと走るものがあつた。

少女の額に脂汗が、瞳に理解が浮かぶ。何者か。何をしたのか。何のつもりか。

縄を取り落とした。指の間から煙が立った。

「う……く……あ……！」

震える両手で腹を押さえ、今にも蹲りそうに背中を丸める。

「い、いや……うあつ……せめて……」

本当は泣き喚きたいだろう。その衝動を必死に抑えて、少女は言葉を絞り出した。

よせばいいのに。

「未遂だった証拠は、残して……！」

梓からすうと笑みが消えた、その刹那。

炎が腹を食い破った。赤い舌はたちまち腕に絡みつぎ、ブレザーを駆け上がりプリーツスカートを駆け下りた。

少女の体の中に、梓は火を点けたのである。

先とは逆に仰け反って少女は絶叫した。弾みに後ろへ投げ出した足が一段下を踏み損ねた。燃え盛る体は真後ろに、真っ逆様に転落した。

――未遂だった証拠。

それは年頃の少女にとって、重大な問題だったのだ。命そのものに劣らず、真実そのものに劣らず。梓がその全てを踏み躪られていたことは、知る由もなかったのだろうが。

……何が、『せめて』。

鈍い音を二つ立てて、一番下で少女は止まった。荒らげる息を持たない代わりに肌を爛れさせ、髪をちりちりと焦がしながら、一番上から梓はそれを見下ろしていた。

全身が灰になるまで、つまり誰であるか特定できなくなるまで、焼き尽くす気でいたかもしれないが、そこまでの力はなかったようだ。少女は体の一部を灰にし、その周りを炭にし、そのさらに周り

も焼け爛れていたが、かっと目を見開いた顔はほぼ無傷で残っていた。晴れて乾燥した日であれば違っていただろうか。

男が少女を誘拐したことは捜査で明らかになったらしい。悪用する者が二度と出ないよう、無人の家を取り壊そうという動きがあった。けれども解体を引き受けるところがなかったのか、その話は立ち消えになったようだ。二階を調べようとした刑事が階段から落ちて足を挫いた話が漏れたのかもしれない。ひよっとしたらその足に、つかんだような手形の火傷が残っていたという話も。

少女は今も階段の下に蟠っている。不本意に手を汚す破目になったのは確かであるにしても、失わずに済んでいたものも少なからずあったことを、手遅れになってから悟ったらしい。それで胸のすく思いをしたというわけでもないのだろう、梓も結局階段の上に留まっている。哀れなことだ。少女はこれから、梓はこれからも、化け物扱いである。眠れずにいるだけのこと、騒がしくなれば苛立つというだけのこと――なのに。

――わたし？ わたしは変わらずに土に混ざって、工事のときにも掘り返されない庭の隅にいる。悲惨な出来事を呼び寄せているつもりも、境遇の重なる犠牲者を引き留めているつもりも――つもりは――ない。

(後書き)

蛇足。

鈍い音二つというのは、頭を打つ音と首を折る音。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5432v/>

悪霊なんかじゃない

2011年8月9日03時28分発行